財団法人八尾市文化財調査研究会報告111

八尾南遺跡第29次調査

2007

財団法人 八尾市文化財調査研究会

財団法人八尾市文化財調査研究会報告111

八尾南遺跡第29次調査

2007

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府の東部に位置する八尾市は、河内平野の南部にあります。河内平野は旧大和川水系の河川により形成された肥沃な土壌を有する土地で、古くから人々の生活の場として適した地域でした。現在でも先人が残した貴重な文化遺産が市内各地に数多く残されております。

今日の八尾市の礎を築いた先人たちが、自然を巧みに利用し、土地を開発し、懸命に生きてきた痕跡が、文化遺産の一つである埋蔵文化財であります。私たちは埋蔵文化財から、「地域に対する愛着」を育み、「現代に生きる知恵」を学ぶことができるものと考えております。

このかけがえのない埋蔵文化財が、近年の開発工事などの増加により破壊され消滅してゆく状況にあります。そこで私共は、破壊され消滅する危機にさらされている埋蔵文化財を、後世に永く伝えるため、事前に発掘調査を行い、その記録保存を行い、文化の継承に役立てることに努めている次第であります。

今回報告する、八尾南遺跡第29次調査は、大阪市消防局航空隊公舎翔風寮の解体撤去に伴い平成19年度に実施しましたもので、古墳時代中期の古墳に伴う遺構・遺物が見つかりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料として、また埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深く感謝申し上げると共に、発掘調査や整理作業に従事された多くの方々に御礼申し上げます。今後とも文化財保護に一層のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年10月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　岩﨑　健二

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市若林町二丁目131番地で実施した大阪市消防局航空隊翔風寮解体撤去に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
1．本書で報告する八尾南遺跡第29次調査（ＹＳ 2007 － 29）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書（八教生文第110号平成19年５月29日付）に基づき実施したものである。
1．現地調査は、平成19年９月３日～平成19年９月５日（実働３日）にかけて、成海佳子を調査担当者として実施した。調査面積は約24㎡である。
1．整理作業は、現地調査終了後随時行い、平成19年９月20日に終了した。
1．現地調査・整理作業には、市森千恵子・鷹羽侑太・中村百合が参加した。
1．本書の執筆・編集は成海が行った。また、遺物写真撮影・遺物写真図版編集は整理係尾崎良史が行った。
1．本書で使用している標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）である。
1．現地調査・整理作業で作成した写真・図面等の調査成果に関連する資料は、財団法人八尾市文化財調査研究会で保管している。広く利用されることを希望する。

目　　次

はしがき
例言
八尾市埋蔵文化財分布図
1．はじめに……1
2．調査の方法と経過……1
3．調査の概要……2
《1区》……2
《2区》……2
《3区》……3
4．調査の成果……4
報告書抄録・奥付

挿図目次

図1　調査地周辺図……5
図2　調査区設定図……5
図3　1区平断面図……6
図4　2区平断面図……7
図5　3区平断面図……8

図版目次

図版1　調査地全景
1区人力掘削
1区遺構掘削
1区全景
1区東壁
1区下層
2区人力掘削
2区1面全景
図版2　2区2面全景
2区埴輪・墳丘検出作業
2区埴輪出土状況
2区東壁
3区1面全景
3区2面全景
3区最終面精査
3区西壁
図版3　出土遺物

1、はじめに

八尾南遺跡は大阪府八尾市の南西端に位置し、行政区画では八尾市若林町・西木の本をその範囲とする。付近の地形は、南から伸びる羽曳野丘陵(河内台地)の先端が大阪平野に融合する部分にあたる。そのため、南が高く北が低い。同様の条件で、西には大阪市長原遺跡が、東～南には太田遺跡・大正橋遺跡が隣接している。また、東～北には木の本遺跡が位置している。

当遺跡発見の契機となったのは、昭和53(1978)年から行われた地下鉄谷町線延伸工事に伴う発掘調査で、地下鉄開通後周辺の開発も進み、これまでに大阪府教育委員会・大阪文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会では数十件の発掘調査を実施している。これらの調査結果から、とくに当遺跡南部では、古く旧石器時代から縄文時代・弥生時代・古墳時代を通じて人々の生活の跡が残されている事が明らかになっている。当調査地の近隣に限っても、豊富な内容が認められている(図１・表１参照)。

2、調査の方法と経過

今回の調査は、当調査研究会が八尾南遺跡で行った29番目の調査で、略号はＹＳ2007-29である。調査の目的は、既設の鉄筋３階建建物を解体・基礎の撤去後、遺構の有無を確認することである。調査地は、鉄筋コンクリート３階建の建物を解体撤去した跡地で、上面の高さはT.P.＋12.1～2ｍ前後、北側道路より0.2ｍ前後高い。調査地は真北からほぼ45度の角度を持った菱形で、南に１区(３×３ｍ＝９㎡)、西に２区(同)、北に３区(2.5×2.5ｍ＝6.25㎡)を設定した。２区では、調査終了間際に北東壁で埴輪の集積が見られたことから、北東側へ１ｍ程度拡張した。そのため、最終的な面積は27㎡ほどに増えている。掘削については、基本的に現地表下0.7～0.8ｍ前後を機械掘削、以下0.6～1.3ｍ程度を人力掘削、さらに0.8ｍ前後を機械・人力併用で掘削し、下層の状況を確認した。調査は１区から順次行い、１区と２区、２区と３区は並行して調査を進めた。現地調査終了後、図面整理・写真整理・遺物洗浄・遺物復元等の整理業務および報文作成・図面トレース・遺物写真撮影・写真図版作成等の本書作成業務は随時行った。

表１　周辺の調査地一覧

※文献番号は巻末の参考文献と同一

調査名(略号)	所在地	原因	面積	期間	主な検出遺構	主な出土遺物	文献
1次(YS1983-1)	若林町3丁目	倉庫建設	(㎡)2600	19830228～19830606	弥生後期(10.6m)：方形周溝墓10・溝・河川1 古墳中期(10.6m)：方墳5 平安末期(10.6m)：土坑・掘立柱建物	弥生土器(Ⅴ様式) 古墳中期-須恵器 平安末-瓦器	①
12次(YS1988-12)	若林町2丁目	工場建設	860	19880829～19881021	古墳中期～後期前半(11.3m)：方墳4・土器集積1・溝1	弥生土器(Ⅰ・Ⅳ様式) 古墳中期以降-土師器・須恵器・中国製磁器・東播系鉢・埴輪	②
14次(YS1988-14)	若林町3丁目	共同住宅建設	100	19890508～19890519	古墳中期(11.3～11.4m)：小穴4 中世(11.4m)：溝2	古墳中期以降-土師器	③
21次(YS1994-21)	若林町2丁目	遊技場建設	743	19940327～19940427	弥生時代後期(10.6～10.8m)：井戸1・土坑13・溝20・小穴41	旧石器 弥生土器(Ⅴ様式) 古墳中期-土師器・埴輪	④
24次(YS1995-24)	若林町2丁目	電気管路埋設	34	19950927～19950929	弥生時代後期(10.8m)：溝状遺構1	古墳中期以降-土師器	⑤
23次(YS1999-25)	若林町2丁目	社屋建設	294	19991208～19991222	弥生時代前期(10.8m)：土坑3・小穴3・溝1 弥生時代後期(11.0m)：溝3 古墳時代中期(11.3m)：溝1 奈良時代以降(11.3m)：土坑2・小穴2	弥生土器(Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ様式) 古墳時代中期-土師器・須恵器・埴輪	⑥

３、調査の概要

《１区》

１区の現地表面はT.P.＋12.25m程度、現地表下0.7mまで盛土がなされている。以下１層旧耕土にあたる黒褐色礫混砂質シルト・２層床土にあたる灰黄色礫混砂質シルトがあり、地表下１m前後で３層灰褐色粘土質シルトに至る。３層には、古墳時代中期の埴輪片のほか、奈良～平安時代頃の土師器杯・高杯などの土器類が少量含まれている。次いで奈良～平安時代の作土の可能性がある４層黒灰色礫混粘土質シルトがあり、河川埋土の可能性のある５層灰色粗粒砂に至る。５層は硬く締まり、この層上面では、**落ち込み11・12**を検出した。それ以下には、河川埋土の可能性のある６層灰色粘土質シルト混粗砂・７層黄～灰色極細粒砂～粗粒砂の互層・８層灰色粗粒砂が0.6～１mの厚さで堆積し、最下には９層青黒色粘土質シルトが堆積する。このうち、８層からの湧水量は多大であった。９層上面の高さはT.P.＋9.8～10.1m程度、地表下２～2.4m前後で、おおむね北東から南西へ下がっている。

落ち込み11：調査区東端で検出した。調査区内では南東－北西方向に伸びる。平面の規模は南東－北西北1.6m・北東－南西0.8mを測る。断面は２段に掘り込まれており、上段0.2m・下段0.3mを測り、底は平坦である。内部には①灰黄色砂質シルト、②黒褐色粘土質シルト混礫が堆積し、②から土師器片が少量出土している。

落ち込み12：５層上面が調査区中央部から西へにぶく落ち込むもので、自然地形と思われる。深さは0.2m程度を測る。

《２区》

２区の現地表面はT.P.＋12.15m程度、現地表下0.6～1.0mまで盛土がなされており、部分的に現地表下1.2～1.5m程度まで近年の掘り込みが見られ、遺構面にまで及んでいる。以下５層までの層順は１区とほぼ同様で、１層旧耕土にあたる黒褐色礫混砂質シルト・２層床土にあたる灰黄色礫混砂質シルトがあり、地表下１m前後で３層茶褐色礫混粘土質シルトに至る。３層には古墳時代中期の埴輪片ほか、奈良～平安時代頃の土器類が含まれる。次いで奈良～平安時代の作土の可能性がある４層茶褐～明褐色礫混粘土質シルトがあり、５層灰白色粘土質シルト混粗粒砂に至る。この層上面では、**溝21・22**を検出した。以下には６層灰白色粗砂と黒褐色粘土質シルトのブロック、７層褐色粗粒砂混粘土質シルトがある。７層上面では、**溝23**を検出した。それ以下には、河川埋土の可能性のある８層灰色極細粒砂・９層灰色粗粒砂・10層灰色粘土質シルト混粗粒砂が堆積する。９層上面では、古墳墳丘盛土の可能性のあるＡ層灰褐色粘土質シルトのブロック、Ｂ層灰色粗粒砂に灰褐色粘土質シルトのブロック、Ｃ層灰白色極細粒砂に黒灰粘土質シルトのブロックが見られ、いずれも硬く締まっている。

溝21：調査区中央部を東から西へ横断して伸びる溝である。規模は最大幅１m・深さ0.5m程度で、直線的に掘り込まれており、底は平坦である。内部には上から①青灰色砂質シルト、②茶褐色粘土質シルト、③灰色粗粒砂に黒灰色粘土質シルト青灰色粘土質シルト・のブロックが堆積しており、一気に人為的に埋められた可能性が高い。

溝22：調査区南端で検出した。南東から北西へ伸びる。幅0.6m・深さ0.1m程度で、断面は浅い円形を呈する。内部には④黒灰色シルト質粘土と極細粒砂の互層が堆積しており、水の流れていたことが判る。

溝23：調査区南西端で検出した。南西から北東に伸びる。検出した最大幅は0.6m・深さは0.2m程度である。内部には⑤灰色粘土質シルト・砂質シルト・礫の互層が堆積しており、水流のあったことが判る。北側の肩は、墳丘盛土斜面をわずかばかり切り込むようであるが、上部の掘り込みや溝21のため、不明瞭である。

墳丘盛土？：２面までの調査終了後、調査区北壁から埴輪片が比較的多量に出土したため、北側へ１m程度拡張したところ、２面検出面より約0.5mの高まりを検出することができた。おおむね北東から南西へ下がっており、斜面に円筒埴輪が数個体まとまっていた。うち、１個体が半分程度遺存していた(図版３－２)。墳丘上面の最高値はT.P.＋11.2m程度、現地表下１m程度で、２層直下に位置する。溝21の掘り下がりが墳丘斜面に一致する可能性も考えられる。

出土遺物：埴輪は破片が数十点出土したが、出土状況の明らかなものは３点(図4・図版３－１～３)である。１・２は円筒埴輪、３は形象埴輪である。その他に須恵器器台４も出土している。

遺存状態の良い２は、口径30cm前後・底部径15cm・高さ43cmを測る。退化したタガが３段あり、外面には１次調整のハケは斜め方向で、底部調整が行なわれている。スカシは円形で、上から２～４段目のタガ間に２個づつ交互に配置されている。口縁直下にヘラによる記号文「×」が施されている。焼きひずみまたは土圧のためか、ゆがみが著しい。

その他の円筒埴輪片も、製作技法などの特徴から、「Ⅴ期」おおむね５世紀末～６世紀のものと考えられ、須恵器器台も同時期のものと考えられる。なお、南西隣の25次調査地でも、「×」印の記号文をもつ円筒埴輪が出土しており、同じ窯で焼かれた埴輪の可能性が高く、「×」は「窯印」かもしれない。

《３区》

３区の現地表面はT.P.＋12.2m前後、現地表下0.5～0.8mまで盛土がなされており、建物基礎のコンクリート等が部分的に現地表下1.2m程度の深さまで及んでいた。盛土以下１～３層は近年の区画整理時に、旧耕土・床土などを整理して埋め戻した地層であろう。現地表下0.9m前後で近世の作土の可能性がある４層黄褐色粗粒砂に茶褐色・黒褐色粘土質シルトのブロックに至る。４層には、近世の国産陶磁器片が少量含まれている。この層上面では、区画整理前まで使われていたと思われる**肥溜め31・32**を検出した。次いで河川埋土の可能性のある５層灰黄色粘土質シルト～極細粒砂の互層・６層灰～橙色粗粒砂～礫が0.5～0.6m程度の厚さで堆積する。５層上面では**落ち込み33**を検出した。以下には７層青灰色シルト質粘土、８層黒灰色礫混粘土質シルト、９層黒灰色粘土質シルトがあり、10層青黒色礫混粘土質シルト、11層灰青色粘土質シルトに至る。このうち、10層から弥生土器が出土している。

肥溜め31・32：調査区中央から西端にかけて検出した。径約１m・深さ0.6m程度を測る。漆喰塗りの側(枠)を持つ。埋土は黒褐色粘土質シルトのブロックからなる。区画整理前にはこの付近に旧道が東西方向に伸びていたことから、農地の北端、道路沿いに２基並んで位置していたものであろう(図１参照)。

落ち込み33：５層上面が調査区中央部から北へ落ち込むもので、深さは0.8m程度を測る。内部には５～８層のブロックがずれ込んで堆積しており、地層のずれの可能性がある。

弥生土器：10層出土の弥生土器は、弥生時代後期の壺の底部と考えられる。底部径2.5cm程度を測る。

４、調査の成果

今回の調査では、２区で古墳時代中期の古墳墳丘の可能性のある高まりを検出することができた。当地の西隣の25次調査地をはじめとして、周辺では同時期の墓や埴輪などの副葬品が検出されていることから、付近一帯はこの時期の墓域であったといえる。

１区および２区では、現地表下１m(T.P.＋11m)前後で奈良～平安時代の土器類とともに埴輪を含む地層（３層）が見られることから、奈良～平安時代頃の開発に伴って、付近の古墳は破壊されたものと考えられる。

参考文献

①駒沢　敦　1984「３．八尾南遺跡第1次調査」『昭和58年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告５（財）八尾市文化財調査研究会

②原田昌則　1995「Ⅱ　八尾南遺跡(第12次調査)」『八尾南遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告47』（財）八尾市文化財調査研究会

③高萩千秋　1990「５．八尾南遺跡(YS89-14)」『八尾市文化財調査会研究年報　平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告28　(財)八尾市文化財調査研究会

④坪田真一　1998「Ⅵ　八尾南遺跡(第21次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』(財)八尾市文化財調査研究会

⑤高萩千秋　1996「Ⅷ　八尾南遺跡(第24次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告54』(財)八尾市文化財調査研究会

⑥高萩千秋　2000「25.八尾南遺跡第25次調査(YS99-25)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

※円筒埴輪については、川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」考古学雑誌64-2　日本考古学会編を参考にした。

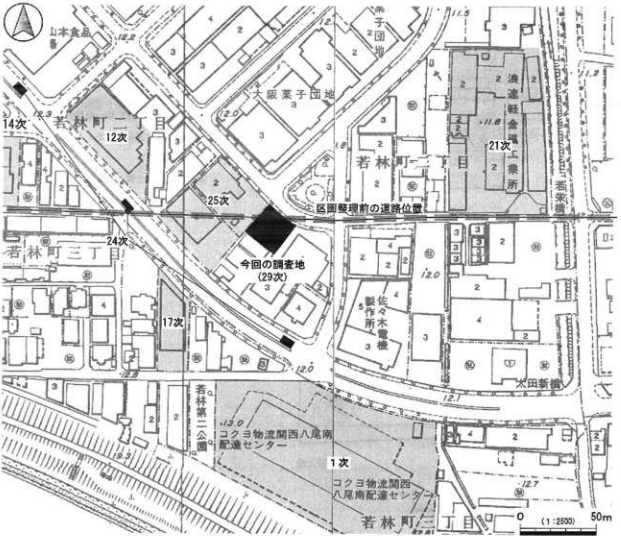
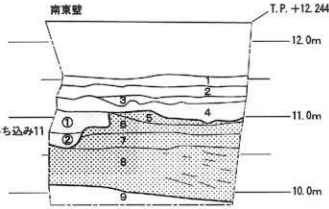


図１　調査地周辺図

図２　調査区設定図



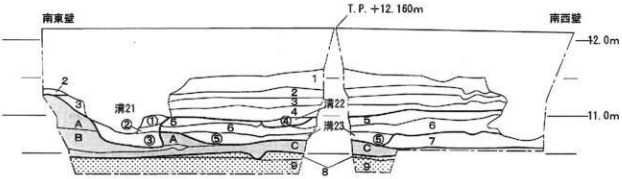
1　黒褐色礫混砂質シルト（旧耕土）
2　灰黄色礫混砂質シルト（床土）
3　灰褐色粘土質シルト
4　黒灰色礫混粘土質シルト（作土？）
5　灰色粗粒砂
6　灰色粘土質シルト混粗粒砂
7　黄～灰色極細粒砂～細砂の互層
8　灰色粗粒砂
9　青黒色粘土質シルト

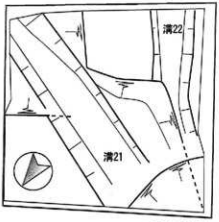
〈落ち込み11〉
①　灰黄色砂質シルト
②　黒褐色粘土質シルト混礫

5層上面

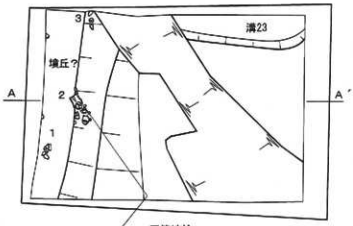
0　(1:50)　1m

図３　１区平断面図





1面（5層上面）



2面（7層上面）

A～C層上面円筒埴輪出土状況

0 (1:60) 1m

1　黒褐色礫混砂質シルト（旧耕土）
2　灰黄色礫混砂質シルト（床土）
3　茶褐色礫混粘土質シルト
4　茶褐～明褐色礫混粘土質シルト
5　灰白色粘土質シルト混粗粒砂
6　灰白色粗砂と黒褐色粘土質シルトのブロック
7　褐色粗粒砂混粘土質シルト
8　灰色粗粒砂
9　灰色粘土質シルト混粗粒砂

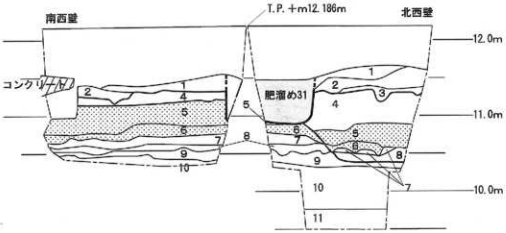
〈溝21〉
①　青灰色粘土質シルト
②　茶褐色粘土質シルト
③　灰色粗粒砂に黒灰色粘土質シルト・青灰色粘土質シルトのブロック

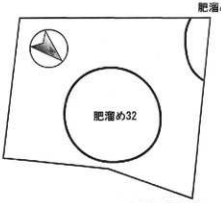
〈溝22〉
④　黒灰色シルト質粘土と極細粒砂の互層

〈溝23〉
⑤　灰色粘土質シルト・砂質シルト・礫の互層

〈墳丘？〉
A　灰褐色粘土質シルトのブロック
B　灰色粗粒砂に灰褐色粘土のブロック
C　白灰色極細粒砂に黒灰粘土質シルトのブロック

図4　2区平断面図





1面（4層上面）

2面（5層上面）

0 (1:50) 1m

1　黄褐色粗粒砂に茶褐色粘土のブロック
2　灰色礫混粘土質シルト
3　青灰色粘土質シルト
4　黄褐色粗粒砂に茶褐色・黒褐色粘土質シルトのブロック
5　灰黄色粘土質シルト～極細粒砂の互層
6　灰～橙色粗粒砂～礫
7　青灰色シルト質粘土
8　黒灰色礫混粘土質シルト
9　黒灰色粘土質シルト
10　青黒色礫混粘土質シルト
11　灰青色粘土質シルト

図５　３区平断面図

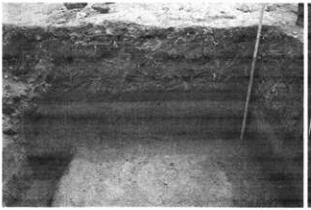
図版１

調査地全景（東から）

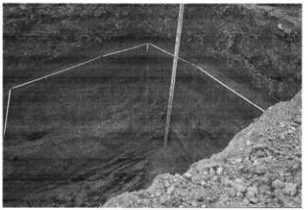
１区人力掘削（東から）

１区遺構掘削（南から）

１区全景（南から）



１区東壁

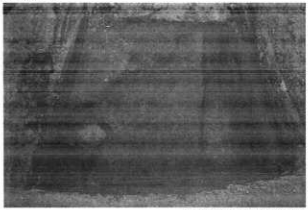


１区下層

２区人力掘削（南から）

２区第１面（南から）

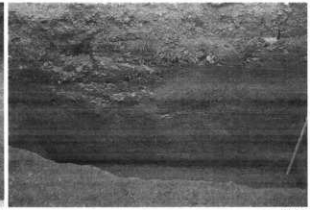
図版２



２区２面全景（南から）

２区埴輪・墳丘検出作業（南西から）

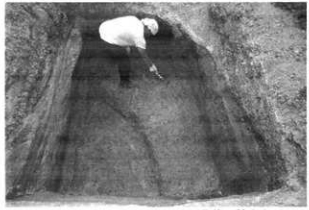
２区埴輪出土状況（西から）



２区東壁

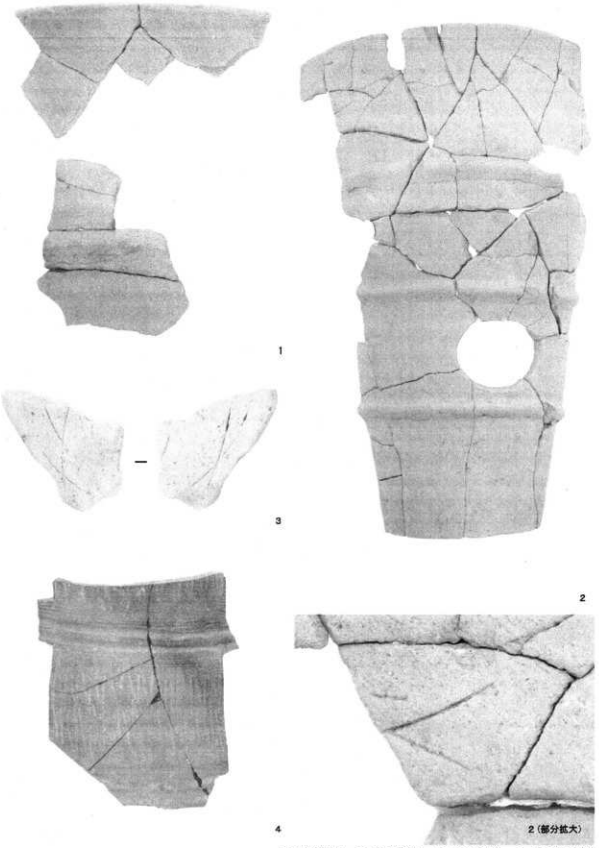
３区１面全景溝（南から）

３区２面全景（西から）



３区最終面精査（西から）

３区西壁



出土遺物（１・２ 円筒埴輪、３ 形象埴輪、４ 須恵器器台）

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじんやおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく111
書名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告111
副書名	八尾南遺跡第29次調査
巻次	
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	111
編著者名	成海佳子
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－2 TEL・FAX 072－994－4700
発行年月日	西暦2007年10月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
やおみなみいせき 八尾南遺跡 第29次調査	おおさかふやおしわかばやしちょう 大阪府八尾市若林町二丁目	27212	1002	34度 59分 04秒	135度 58分 04秒	20070903 ～ 20070905	約24.25㎡	建物解体撤去工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八尾南遺跡 第29次調査	生産域 集落域 墓　域	近世 古代 古墳時代	肥溜め2基 溝4条、落込み1箇所 墳丘？	埴輪	
要　約	現地表下1m前後の床土直下で、墳丘の可能性のある高まりを検出し、その斜面から円筒埴輪が出土した。				

財団法人八尾市文化財調査研究会報告 111
八尾南遺跡第 29 次調査

発　行　　平成 19 年 10 月 11 日
編　集　　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒 581 - 0821　大阪府八尾市幸町四丁目 58 番地の 2

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告

2007

財団法人 八尾市文化財調査研究会